

【佳作】

繋がり合う毛糸

加藤文子・長野県

母譲りの器用さで、ビーズのアクセサリーを編んでいる。目に留まる母そつくりの紅葉みたいな手。ふつと、母と話したくなる。

私は縁あふれる青森で育った。洋裁師をしていた母は、よく洋服や編物を作ってくれた。小さい体のくせに、祭と喧嘩、雷が大好きで、曲がつたことが大嫌いという強烈な人だ。しょっちゅう「はんかくせえじや」と叱られた。『あほみたい』という方言だ。すぐ腹を立て、扉をバーンと閉めるのが日課だった。勢いで開いた扉をしぶしぶ閉める父。

私が同級生に小さな傷を負わされた時も、「はんかくせえがき、せいばいしてやるぜ」と小学校へ乗り込んでいった。社長だろうが、先輩だろうが理不尽な人にはかかっていった。会社を啖呵切って辞めても「わくわくしちゃった」と帰つてくる。自分の事を正義の味方と言つていたが、しょっちゅう会社を辞める母はそんなかっこいいものではなかった。物心つく頃から反発し合い、顔を合わせば喧嘩した。高校を卒業すると、母とは別の道を歩みたくて大学へ進学した。

「来ちゃつたべ」

舌をぺろっと出して片目をつぶる母。突然の母の東京来訪は本当に凍りついた。社会人となり、一人暮らしをしていた時のことだ。

久しぶりに見る母の姿には少しばかり胸が痛んだ。右に十度傾き、十歩歩けば、五分休む。聞くと股関節症を治す名医に会いたいのだという。小さい体がさらに縮んで見えた。

数週間だと思つた母の滞在であつたが、箪笥やらミシンやらが届いて閉口した。家族でいたのと一対一とでは受けれるダメージが違う。料理が薄いと醤油でもかけようものなら「おめで作らねえのに、このあほんだらあ」と叫びながら、アパートのドアをバーンと閉めて出て行く。作つてくれた洋服が大きすぎたので、ちよつと直してと言えば「サイズ嘘言ふからだべ」とまたバーン。三日に一度のバーン。大家さんが下に住んでいるというのに、毎度の大音量で冷や冷やした。東京で行く所なんて無いくせにと思っていると、一時間程で母は戻つてくる。そして鼻歌交じりでミシンをカタカタ鳴らした。「明日、パフェでも食うべ」としがつと言つた。

母は毎日洋服を縫つたり、編んだりしていた。そのうちに一人で洋服、ブラン

ドを作ろうという夢が生まれた。一人で出掛ける際には最後に百貨店に寄り、新作の洋服をじっくり眺めた。「オーダーメイドでサイズぴったりのを作るべよ」そんな夢物語をよく話した。母手製の服を着た私を見て、どこのブランドかと聞いてくれる人まで現れ、その話をすると、母はこぶし二つを鼻に重ねておどけた。もつと早く行動に移していれば良かった。

次第に脚も良くなつて、夏は熱海かねと言つていた矢先だつた。母はあつとう間に癌で逝つてしまつたのだ。宣告されてから手の施しようがなく、一ヶ月でお別れとなつた。楽しみにしていた夏まで生きられなかつた。

あんなに強烈なパワーだつたくせに死ぬなんて嘘つきだ。私は悲しいというよりなぜだか腹が立つた。直前まで私より長生きしそうなくらいに元気だつたのに。悔しくて悔しくて、母の物を次々と壁に投げつけていた。

ずっと一人になりたいと思つていたのに。母のいない日々は平和なのに。それでも母に会いたかった。罵声とミシンの音が聞こえない部屋は、静かつた。母の物をようやく整理できるようになるまで、二年必要だつた。温かい風が夏を呼ぶと同時に、段ボールが私を呼ぶ。開くと、懐かしい母の匂いが私を包んだ。母のジャンバー、眼鏡、バッグそしてミシン。

その後手帳が目に留まり、バラバラとめくつた。一番最後に写真がはさんであるのを見つける。写真を見て息を飲む。そこには高校生の私がいた。母の編んだセーターを着ている。紺色に白いラインが入つてゐる二色のセーター。手編みを着るのが恥ずかしくて照れ笑いする私。鼻歌混じりで編んでいた母の姿が目に浮かぶ。涙がぼたぼたと写真の上に落ちていく。写真を撮つた頃は、仲良しとはほど遠かつた。二人で住んでからも喧嘩ばかりだつた。それなのにちゃんと私を想つてくれていた。背を向けていたのは未熟な私の方だつた。初夏の太陽が窓から注ぎ、セーターの感覚が私を温め続けてくれた。

一緒に過ごした少しの時間は神様からのプレゼントであつたのかもしれない。手作りの服と共に人生を紡いできた私達。いろいろあつた二人はこの手編みのセーターミたいだ。二本で絡まりあつて、影響しあつて、模様を編む。その時は何が何だかわからなかつた。でも、最後に見てみると、ちゃんとひとつ絵柄ができあがる。

今日も怒つて暴言を吐きながら扉をバーンと閉めてはつとする。短気にだけはなりたくないのに。勢いで開いた扉をしぶしぶ閉める夫は父みたいだ。母に会えなくなつて六年。の中にちゃんと母が生きている。